

大妻女子大学 家政学部児童学科 樺山敏郎教授のご講演

※ 動画を視聴する際、ご参考までにご覧ください。

開始～10分 自己紹介

- ・教育の全国的な国語科の流れ
- ・香川の子供からの宿題
- ・QRコードから研究室へ「hippo」
- ・高度専門職…子供を洞察する力をもった教師
- ・学びの方法論「ラーニングマウンテン」の紹介
- ・R7からCBTが段階的にスタート 国語の学力観を問う 記述はタイピング
- ・不易流行とは、教育に求められている不変の中に変化を取り入れること

10分～19分 研修資料の説明

- ・ネガティブ・ケイパビリティ…不確か、不可解を受け入れる力(心理学)
- ・Well-Beingの深化 …みんなの幸せを願う



真正の学び、本物の学び(例:ヤドカリとイソギンチャクの共生)

Well-Being とは何か

今が楽しい、刹那である幸せから将来に希望が持てること。クラスや地域の人々の幸せを願うもの。視野が広がっていることが期待される。真正の学びをすること。学びの場では、もっと学びたいと思うことがWell-Beingである。

- ・アダプティブ・ラーニング
- ・社会構成主義 →人間関係が現実を作るという考え方
- ・エージェンシー→「変化を起こすために、自分で目標を設定し、振り返り、責任をもって行動する能力(OECD)」
- ・PBL(問題解決学習、課題解決学習)

19分～「学びの文脈」について

学びの文脈とは何か

文脈とは、点と点の結びつきがあること。TPOがある多くの観衆の中では、丁寧な言葉、正しい服装で講話をする。教室の中では、話し合いがインフォーマル、発表がフォーマルになる。説明文の背景がどこにあるのかという前後の関係の要素が含まれる。学びにおいては、誰のために、何のために、どこまでやるのかを考えるということ。文章がどんな関係性にあるのかを読み取ることも同じ。カリキュラム全体を考えることも文脈を整えるのと同じ。説明文が何のために、誰のために読むのかという子供の視座に立って考えることが大切。学習というものは、スタートからゴールまである。子供の分からないことやもっと学びたいという声を聴くと、学習者にとって付けたい力を考えて、教師はプロセスを考えながらゴールを目指す。

- ・カリキュラムマネジメント
- ・子供の状況を考えることを大切に。
- ・学びそのものが「何のために」「誰のために」「どこまで学ぶのか」を要素として考える。

27分～ ラーニングマウンテンについて

- ・ Learnig・Mountain の活用（学びのゴールとプロセスを見える化したもの）
 - 子供と一緒に単元計画を立てる。
 - 学んだことを具体的に確認したり、途中変更したりできる。
 - 前年度の学習ともつないでいく。

32分～ “ラーニング・マウンテン”の作り方

- ・ 授業実践の具体例より

52分～ おわりに

- ・ 最適化される学びから最適化する学びへ
- ・ 教師が様々な料理をレコメンドして、子供がその中から選ぶ時代になる。子供が自分にベクトルを向けて、自分で選んだもので自分ができるようになるように育てていく。
- ・ 「どのように学ぶか」というプロセスに関わり、しかけや伏線を豊かに構想するのが教師。随時立ち位置や出番を検討し修正し、深い学びへ誘うことで「**学びの文脈を創る**」
- ・ 教師の姿→カウンターで横に座るように、同じものを一緒に見て話すようなものにならない。テキストを通して一緒に考える。

